

# 近世大津代官所同心の編成と勤務態勢の確立

渡 邊 忠 司

〔抄 録〕

近世大津は京都への人的・物的な入口であった。その大津市中と周辺直轄領を支配・管轄した大津代官には同心が配属され、代官職と町奉行の側面とを備えていた。それは安永元年（一七七二）以降に確立したが、近世初期からの成立経過や実態、また同心らの組織と職務また勤務の実態は明らかになっていない。本稿

は同心であった佐久間家の記録を用いて、その一端を明らかにした。

キーワード 大津代官、同心、三職兼帯、手代、京都町奉行

## はじめに

近世大津代官は代官職・町奉行職・船奉行職三職兼帯であったが、徳川政権の地域支配役職・体制として特徴的な役職であった。職務内容は、近江を中心とした在方直轄領と大津市中および大津百艘船と湖上舟運全般の支配管轄であった。この職務遂行には、代官と用人・手代・下役などだけでなく、これらに加えて同心<sup>①</sup>二〇人が担っていた。

大津の地域支配体制と行政機構の独自性は代官の三職兼帯と同心の配属にあったが、成立過程と職務実態についてはこれまで詳細に検討

されたことはない。『大津市史』（中巻）・『新修大津市史』（第三巻）によると、近世初期徳川政権の大津支配は慶長六年（一六〇二）に大久保長安と代官小野貞則による奉行（国奉行・町奉行の職務）と代官という機構から始まり、長安没後に代官小野氏が在方支配と町方支配を兼務する機構となり、さらに元禄十二年（一六〇九）には小野氏の世襲代官の停止、享保七年（一七二二）の京都町奉行による大津支配、安永元年（一七七二）の石原氏の代に代官支配の復活という経過をたどることを述べるが、代官に同心の配属という事態や勤務実態を通した、特徴的な支配体制成立に関する検討はない。<sup>②</sup>

近世大津の支配体制の確立は、京都所司代を基軸にした上方八ヶ国・西国の支配体制の整備と関連し、遠国奉行のもとで実務を担う与力・同心体制の確立と関連している。これについては藤井讓治氏が朝尾直弘氏の示唆を受け継ぎ、京都所司代権限の分割委譲による支配機構の整備を考察している<sup>③</sup>。概略すると、慶長五年以後の京都・伏見を基軸にした軍事的支配態勢の整備、元和元年（一六一五）の豊臣氏滅亡を契機とした京都・大坂を基軸にした畿内・西国の軍事的・政治的支配態勢の拡大整備、家光政権の政治行政機構に対応した上方八ヶ国と遠国奉行を基軸にした畿内・西国の地域支配機構の成立があり、天和から元禄十二年にかけての幕府勘定所機構の改変による畿内・西国の町奉行と代官所機構・代官の改変・肅正を経て、享保七年の国分けに至ったが、大津の体制・機構改変もこれに関連している<sup>④</sup>。

しかし、藤井氏はその実務・職務遂行の機構について多くは触れておらず、特に大津の支配行政機構、その下での同心体制について触れるところはない。大津の同心は寛永五年（一六二八）に小野貞則を継いだ貞勝の代に置かれ、王政復古期まで維持された。表1は宝暦九年（一七五九）の大津の同心編成を示したが、一〇人二組に編成され、月番で勤務に就いていた<sup>⑤</sup>。安永元年以後の大津では代官が在方だけではなく、同心とともに町方を管轄・統制する体制として推移し、王政復古を迎えることとなる<sup>⑥</sup>。

近世初期の京都所司代を中心にした京都・畿内の支配体制は、將軍による領主（大名・寺社等）支配体制の整備の一環である。近世の支配は將軍による領主層の支配、領主層存立の基盤である百姓・町人の

支配、それに物流（生産流通消費構造）の統制・統括を基軸に、支配機構の職務・実務によつて実体化されている。それゆえに、特に地域の行政執行機関である遠国奉行・代官の職務・実務機構の解明は重要であり、大坂・京都など町奉行配下の与力・同心体制の確立と実務実体を検証することが必要である。その観点からみれば、徳川政権の地域支配体制としての与力・同心体制の確立は、慶長・元和に江戸から「赴任」「出陣」した与力・同心が徳川政権からも市中町民からも「土着」「地付」の武士と見なされるようになった時点ととらえることができる<sup>⑦</sup>。

本稿は大津代官の特徴的な支配機構と体制、特に代官に同心の配属という体制が形成された要因と経過を検討する。同心は大津代官の配下として大津市中の支配・管轄の実務機構を担った。この特別な事例の実態の把握はこれまで詳細に論じられたことはなかった。大津代官の支配態勢の特質解明には、この同心体制が形成された過程と背景の検証が第一義的な要件であろう。この点を大津代官所同心の土着化・地付化に注目して検証する。

## 一 大津代官所同心配属の背景

### （一）大津代官所同心の登場

近世大津代官所における同心の配属は寛永五年（一六二八）であったが、その契機は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役後に、大津に配置された小野貞則に預けられた与力三五騎である。貞則は大久保長安

とともに大津に配置され、近江国と大津市中を分割して支配・管理し、『寛政重修諸家譜』（以下『諸家譜』）によると、近江国の郡事を沙汰する任務を命じられた。<sup>8)</sup>

慶長五年関原御陣のち、仰をうけて京極高次が立のきし大津の城にいり郡事を沙汰す。このとき騎馬の士三十五騎をそへられ、吹貫の指物をたまふ。のち彼地の御代官となり、かねて市中の事を沙汰す。

貞則は以後寛永五年まで代官を勤めたが、大久保長安死後の元和元年（一六一五）以後は代官で大津市中の事を沙汰する町奉行の職務も兼任した。小野氏は大津富商の出身で、近世初期豊臣政権・徳川政権に徴用された在地領主・土豪層に系譜を持つ代官の一例であったが、大津に居住し在方と市中を支配する特異な代官となった。貞則が職務にあった期間、配属された与力三五騎は廃された記事を確認できないので、慶長五年以後寛永五年まで与力は在方・町方の実務を管轄し、小野貞則の職務遂行を助力していたとみてよい。

大津代官小野貞則配属の与力に代わり、寛永五年に小野喜左衛門貞勝が職務を継いだとき同心二〇人の配属があった。貞勝は『諸家譜』によると、大津市中の盗賊を捕縛した褒賞として同心を配属されている。<sup>9)</sup>

慶長十三年はじめて東照宮に拝謁す。時に十三歳。寛永五年、さきに貞勝大津八町の客舎にかくれたる強盗五人をからめ捕てたてまつる。其働を褒賞ありて同心二十人をあづけられ、大津を支配し、九年十月九日父にさきだちて死す。三十七。法名宗閑。

初代大津代官貞則が職務および家督を貞勝に譲り、貞勝が二代目の大津代官となった。しかし貞勝は寛永九年に三七才で早世し、貞則が再度大津代官となるが、貞勝への引き継ぎはわずか四年間とはいえ世襲代官小野氏の成立でもあった。

貞勝は家康に拝謁後、寛永五年より以前に「大津八町の客舎」にかくれていた強盗五人を捕らえたところのように、大久保長安死後に職務が拡大した父貞則の下で、大津市中の治安維持にかかわっていたとみられる。貞勝はその経験を前提に、代官世襲とともに市中管轄の職務を兼帯し、すでに預けられていた同心二〇人とともに町方の実務を遂行していたのである。

このときが大津代官所同心の登場といえるが、これには大津代官所同心であった佐久間氏の記録でも確かめることができる。この経緯は文政十三年（天保元年、一八三〇）『西山町字大濱一件留』に記される。<sup>10)</sup> やや長くなるが、後述との関係もあるので、全文掲げておく。

#### 奉願口上書

寛永四卯年大津同心初而被 仰付候節、拝領地無之銘々町方二借宅住居仕、宿料者大津町中より差出候処、元禄十二卯年大津御藏奉行相止、右明屋敷地古郡文右衛門殿支配之節申立有之、享保五年九月同心屋敷地二被下候得共、急々小屋建難出来、畑二貸付致置候処、右地面二小屋建壱軒も不致候而者申立候詮無之、勿論御入用ニも難申立候間、右畑年貢貸付普請料ニ可致、尤纔之銀高二而手数掛り可申間、御代官所小物成口銀之内貸可申間、年貢代と一緒二身元宜町人江預ケ利倍可致旨申渡有之貸付置候処、同七寅

年御代官所替被 仰付、夫々京都支配二相成、右拝領地二建家いたし候共御役所迄ハ手遠ニ付、同八卯年当時私共住居之地成共替地相成、小屋建及候手当金銭百「ムシ」代外付、利倍いたし金主とも相成候付、延享二丑年小屋建ニ差懸り、同三寅年三月引移申候、然処近年屋根雨洩候付、銘々手入仕候得共年久敷相成、一躰土居葺ずり下り、雨洩ニ而打腐葺替不申候而者難保趣ニ付為積候処、凡銀六貫目余相懸り候ニ付、毎々打寄種々申談候得共、右銀

子出方無御座、此儘捨置候而者往々住居も難出来可相成敷ケ敷奉存候、右申上候通銀高ニも有之、銘々手前ニ而出銀可仕様無御座候間、御憐愍を以何卒御勘弁被成下候様奉願候、願之通御聞届被成下候ハ、一統難有奉存候、此段宜御沙汰被下候様奉願候、以上、

文政十三年寅七月

佐久間 啓助印

佐久間 又兵衛印

川嶋 惣右衛門印

記録は大津代官所同心の屋敷が破損した際に修復を願って差し出された「奉願口上書」（原文は朱筆）である。これによると、大津同心の配属は寛永四年となっているが、これは任命と着任年次の違いであろう。ここで注目しておきたいのは、同心が配属された当初は拝領地つまり屋敷はなく、町方の住居を借宅し、宿料は大津町中から賄われていたとあることである。同心屋敷がなかったという事態が、この時点では大津代官への同心配属は恒常的な役職と考えられていなかったことを示している。

記事にあるように、同心屋敷の「小屋立て」の計画は元禄十二年

（一六九九）以後のことであった。申請時の代官は古郡文右衛門ではなくて正しくは兩宮庄九郎であるが、大津同心は配属から延享三年（一七四六）まで同心屋敷を与えられていなかったのである。その間、当初のまま大津町での借宅と町方からの宿料の賄いが続いていたとみられる。記録は、その同心屋敷が文政十三年に至り破損したために修繕したい旨を願い、その費用の負担も願っているが、同心屋敷「小屋建て」の経緯をも示している。

## （二）同心屋敷設置と大津同心の土着・地付化

文政十三年の記録は大津代官所同心の土着化・地付化を示す記事でもある。屋敷は元禄十二年（一六九九）四月の大津藏奉行廃止による奉行屋敷跡地に計画された。記録によれば、その跡地が享保五年（一七二〇）に下げ渡され、延享三年に小屋立てされたが、享保七年に大津が京都町奉行の支配となったことで急速に具体化した。この支配管轄の変更は、畿内西国の支配機構の改編と関連しており、小屋建ての申請もこの事態に関係している。

また元禄十二年は、代官小野氏の世襲の停止と兩宮庄九郎の代官任命、京都町奉行が一時伏見奉行をも兼帯する形態となり、元の機構に戻された年でもあり、恒常的な大津代官所同心の配属と固定化につながる契機でもあった。小屋建ては延享三年に完成するが、実質的には元禄十二年の新任代官の就任に合わせた申請が土着・地付と見なされるようになった契機とみてよい。

この点を、前出の記録と天保十三年（一八四二）『西山町字大濱一



件留』(以下『大濱一件留』)によって確かめておこう。<sup>11)</sup>

同心屋敷は大津蔵奉行の跡地の拝領から始まった。大津蔵奉行は京都御蔵奉行に統合されたが、これも天和から元禄期にかけた幕政改革、特に勘定所の機構改変の一環であった。<sup>12)</sup>大津蔵奉行は廃止されたが、蔵奉行の職務がなくなっただけではなく、元禄十二年以後は大津代官の兼帯となった。同心との関係から言えば、役屋敷の空地はこの後元禄十五年七月に大津同心への預け地となった。これに対し、さきの文政十三年の記録では大津同心たちは空き地を同心屋敷とする要望を差し出し認められたとするが、『大濱一件留』では享保十四年の「覚」を掲げて、預け地となったことだけを記している。

#### 覚

大津字大濱と申所、御明地之儀御尋被遊候、前方御蔵奉行様方御屋敷建有之候所、三拾年以前方明地二成、元禄十五年七月右地面御用地二相成候迄私共仲間江御預ケ被 仰付候旨、其節之大津町支配雨宮庄九郎殿被申渡、于今相預被在候、以上、

(朱字)「享保十四

東組頭」

酉八月十五日

川 嶋 覚右衛門

この「覚」は、享保七年に京都町奉行支配になった後に京都祇園新地清水屋五郎兵衛が差し出した拝借願に対して、蔵屋敷跡地の来由を京都町奉行から尋ねられ、大津同心東組頭川嶋覚右衛門が差し出した返答の書付である。『大濱一件留』では享保五年に同心屋敷地に下されたところがあるが、ここにはその記事はなく、御用地となる迄の預け地という事実のみが確認される。

また文政十三年の記録では、小屋建ての資金がないために畑地に貸し付けたともあり、清水屋五郎兵衛の拝借願の差し出しと関連している。この願はなかなか認められなかったが、それは跡地の利用状態と関係があった。跡地は三四〇坪余で、その一部が代官支配地として利用され、残り一反一一步、坪数三一五坪八厘は延享三年に同心屋敷が建てられるまで貸付地として運用されていた。代官支配地は二六坪半の「湖上船判改押小屋」で、残りの三一五坪余は割木・薪揚場として貸し付けられていた。置料は一石四斗で、同心仲間惣代の上京入用に当てられていた。<sup>13)</sup>

貸付地は屋敷地普請の資金不足とそれを補うためでもあった。記録によれば、役所ないし幕府から資金の提供または援助はなかったため、普請金の確保と拝領地の維持が当面の課題となっていたことによる。貸付地は享保七年に大津市中が京都支配に替わったあと、同十四年西八月に京都の者が京都東役所に建家願いを差し出し、さらに延享三年にも貸付地拝借の願いがあつたがいずれも取り上げはなく、結局東西両組同心小屋が建てられることとなったのである。<sup>14)</sup>

この後も二六坪余の「湖上船改并焼印押小屋」と同心小屋以外については、京都町奉行所において貸付地として入札を募ったりしているが、借用を望む者はなく、明和九年(安永元年、一七七二)には京都町奉行支配から代官支配へと戻ることとなった。<sup>15)</sup>

大津蔵奉行屋敷跡に同心屋敷設置という申請は元禄十二年であつたが、その認可は同十五年、普請の許可は享保五年であつた。しかし「小屋建て」は資金難から延享三年までかかっている。「同心小屋」

が建てられ、それまでの大津市中借宅という状態が解消された。仮住まいの同心らは、大津で世襲的な職務引き継ぎを行うための専用住宅を確保したことになる。

大津同心の土着・地付の武士という状態は京都町奉行支配下の延享三年に確定したことになるが、同心屋敷普請の申請は元禄十二年にあった。元禄十二年は世襲代官小野氏が兩宮庄九郎に替わったときであり、畿内の支配行政機構も改変された時期でもあった。小屋建ては延享三年であつたが、天和から元禄にかけての京都・大坂町奉行等の行政機構の改変と対応させると、元禄十二年の「同心小屋建て」申請が土着・地付化の指標とみてよい。<sup>16</sup>そこから延享三年までかけて同心屋敷が出来上がったということになる。

## 二 大津同心の組織編成と勤務

### （一）組織成と勤務

寛永五年（一六二八）、大津代官小野氏二代目貞勝に同心二〇人が配属されたが、大津代官は幕府直轄領在方の統制・管理が本来の職務であるから、それに対応した代官所の手代以下の官吏もいた。大津代官の特質は代官的職務と町奉行の職務の双方を統括するところにあつた。代官的職務については、小野氏期の職務機構は不明であるが、石原期の職制・職務については『新修大津市史』に概要が記されている。それによると、職制として元締・小頭・横目・町役・目付が挙げられている。但し、代官所としての機構や定員も不明で、その直轄領支

配・統制の具体的な検証は在方史料の分析を行う必要があると指摘するにとどまる。当然に町奉行的職務もほとんど触れるところはない。<sup>17</sup>

代官所附の同心という位置づけから、大津代官所同心は代官の町奉行的性格に対応した職務に特色があつた。その一つは大津市中の治安維持と訴訟、窃盗・盗賊の取締と捕縛および吟味であり、二つは遠国奉行的役割に伴う職務執行のあり方である。大津代官が基本的には在方支配の管轄・統制であつたから、これは大津代官が京都町奉行・大坂町奉行の支配所・支配国とかかわる窃盗・盗賊捕縛・吟味の執行の仕方を確認すること、また遠国奉行の職務を確認することに繋がる検証でもある。この検証については別に検討する必要があるが、<sup>18</sup>ここでは大津市中の職務に関する具体的な事例を検証して、大津代官所の位置づけと同心の役割を確認しておこう。

大津同心の職務は、『御組出役定書』（以下『出役定書』）に「常例之部」「神事之部」「御案内之部」「御通り之部」「見習衆勤之部」「檢使之部」「欠所廻り之部」（闕所廻り之部）「捕之部」が挙げられている。<sup>19</sup>この記録は、主に天明元年（一七八二）以降の同心勤務の慣例や定を記すが、これらによって、その出役の概要をみておきたい。

「常例之部」は出勤時の服装の規定である。それによると、正月から十五日までと毎月の朔日・十五日という式日には羽織袴、麻上下の正装が義務づけられ、それ以外は「常躰」での勤務であつた。「神事之部」は近江坂本の日吉山王社祭礼の際の警固・検使見分としての出役である。特に山王社と大津四宮社の間で執行される榊迎と榊送りの警固等が勤めであつた。「御案内之部」と「御通り之部」は年礼の案

内、老中・所司代や長崎御用役など公儀御用の大津通行に際した先払い役での出役に関する規定である。「見習衆勤之部」は見習衆の御番入や助番、舟木勤などについての慣例的な規範の規定である。「検使之部」は変死・病死などの見分・検証、「欠所廻り之部」は闕所になった屋敷・土地の巡回見分に關わる出役であり、その規定である。

「捕之部」は本文部分には「捕もの之部并取鎮メ之事」とあり、不審者・乱心者、殺傷、盜賊などの捕縛・取り鎮めへの出役規定である。

そこで、これら出役に際する大津代官所同心の編成と職務機構を確かめておきたい。さきにも触れたように、同心の配属は寛永五年であったが、その際の編成は明確ではない。基本的な勤務体制は、一〇人宛の二組総計二〇人であったことは確かであるが、宝暦九年（一七八九）の「京都袖中武鑑」（『京都武鑑』）によると、大津同心は一組九人宛の二組編成で、それぞれ東組・西組と称されていた<sup>20</sup>（表1）。これは享保七年（一七二二）以後の京都町奉行支配下での京都東西町奉行所の編成に従った呼称である。東西九人宛となっているが、欠員があったため、本来は一〇人宛の編成であった。

宝暦九年時点での編成からみれば、寛永五年の大津同心も他の遠国奉行配下与力・同心と同様に、月番・非番という勤務実態に対応した二組編成であったとみてよい。この編成のもと、同心の編成が組頭と目付を基軸に組み立てられていた。このほかの役職としては、宝暦十一年の「仲ヶ間申合條目」および明和八年に仲間條目について「再相談極ヶ条」「再儉約申合」、明和九年の八月十八日の舟木詰番ほかの出役記録などから抽出すると、舟木詰、宿場横目役、御林山懸りがあり、

表1 大津御役所同心組一覧(宝暦九年)

西組		東組	
組頭	安井南兵衛	組頭	手塚傳左衛門
目付	高田武左衛門	目付	多湖甚助
	佐久間半蔵		塚本平良
	中嶋新平		宮川良助
	八戸友右衛門		赤井弥惣次
	安井彦七		八代専蔵
	高橋左兵次		岡田六右衛門
	片岡定八		宮川幸左衛門
	佐治源太		多賀直右衛門

備考：『京都武鑑』（叢書京都の歴史7  
京都市立総合資料館）による。

天明四年三月二七日付けの記事からも宿場横目役二名、御林山懸り二名が見出される<sup>21</sup>。

大津同心の組編成は京都管轄下では、二組それぞれに同心組頭・目付が置かれ（表1）、天明五年の記録では、組頭・目付のほか横目役・書記方も見える。これらを参考にすると、

名）・目付方（二名）・横目役（二名）・書記方（二名）があり、双方の組惣代（二名）がいた。役職は一役限りが基本であったが、これに「小口」の勤め方があり、兼帯が一般的であった。「小口」の職務には舟木行（舟木詰、検視・地廻り、三井寺御案内、遠方御用（膳所・瀬田・坂本）、京都行・広間詰、御林山見分、お陰札払、出立先払（大津、草津・坂本・伏見・京・宇治・石山）、神事立会廻り、二・五・十月欠所（闕所）廻り、火道具改め、町役中立会廻り・御番方立会廻りがあった<sup>22</sup>。

同心の勤役は、大津代官所在方支配の機構に元締・手代以下に小頭・横目・町役・目付が置かれていたことと対応しているが、町奉行的職務を遂行する機構であった。またこの職務は「見習」による勤務の相続の慣例化で維持された。「見習」は正式に相続する前に職務に習熟させるために同心の子息を勤務入りさせる方式であった。「見習」

は京都・大坂等の与力・同心と同じく、土着化・地付化による職務の世襲化を示している。<sup>23)</sup>

各組とも常に各組七、八人が役職に就いていたが、それに対し、火事・病気などによる非常時の出勤もあった。その際の出役は御番方の者が勤め、その後は「助ヶ方」が勤めることになっていたが、次にこれらの勤務内容を確かめておきたい。

## （二）勤務体制と勤務

大津同心の職務と勤務について、宝暦十一年（一七六一）十月に両組が申し合わせた『仲ヶ間申合條目此外預り畑一件覚』（以下『仲ヶ間申合』）および前出『出役定書』によって見る事ができる。

勤務形態は、東西それぞれが月番と非番に分かれ、昼番（昼勤と泊番（夜勤）を繰り返す一二時（いわゆる二四時間）体制という平常勤務を基本に、年頭・月初また年末などの定例化した礼式と、婚礼・誕生あるいは昇任などの祝儀と同僚や上級諸役人、將軍・禁裏などの葬礼に関係した儀礼に伴う勤務、大津を通行する参勤大名や禁裏関係、また罪人の護送・盗賊の捕縛、市中と周辺地域の祭礼等の警固などの臨時勤務、火災・水害などに関する非常時の勤務等々に分けられる。

これらの勤務の実態を、記録の記事から拾い上げて検証しておきたい。

『出役定書』によると、さきにみたように、勤務は常例・病氣・神事・御案内・御通り・見習衆勤め・検使・欠所（闕所）廻り・捕（捕縛・取り鎮め）および儉約と武芸出情があった。これらの出役を、月番の昼番・泊番、夕番・明番という勤務順で対応していた。勤務には、

さきに触れたように、「常躰」つまり平服での勤務と、年頭儀礼と朔日・十五日また八朔など式日の勤務、それに非常時の出勤があった。

常例の勤務は基本的に役所勤務と「小口」の出役を兼ねる勤務形態である。服装は「常躰」と麻上下、羽織・袴に分けられていた。「小口」は「常躰」での勤務であったが、御役所御番と広間詰および京都所司代・京都町奉行巡見の際の御役所立ち寄りには正装による勤務が義務づけられていた。正月元日から五日までの御役所御番は麻上下、六日は羽織・袴、七日は麻上下、広間詰は兩人詰め、正月元日から七日までと八朔、所司代・町奉行の大津役所立ち寄りには麻上下の着用が義務づけられていた。

小口の出勤は役所・広間詰とともに出勤順が決められていた。その出役順番は、舟木行、検使、地廻り、三井寺御案内、膳所・勢田・坂本遠方御案内、京都行、広間詰などとなっていた（表2）。舟木行か

表2 小口勤務種別と順序

順序	種 別	備 考
1	舟 木 行	支度引あり
2	検 使	
3	地 回	
4	三井寺御案内	
5	遠方御案内	膳所・勢田・阪本
6	京 都 行	
7	広 間 詰	
8	御林山見分検使	
9	当 番	阪本・伏見・京・宇治・石山
10	夕 番	
11	御 用 番	
12	大津出立先払	
13	大津出立問屋場	2月・5月・10月
14	草津他出立先払	
15	草津他出立問屋場	
16	神事立会廻り	
17	闕(欠)所廻り	
18	火道具改	
19	町役中立会廻り	
20	御番方立会廻り	

備考：大津代官所同心佐久間家文書『御組出役定書』



ら始まって、町役中立会廻り・御番方立会廻りまで約二〇以上に及んでいる。東西一〇人宛の組織から見れば、一人当たりの勤務兼帯は加重であつたと見られる。それ故か、諸御用勤務はまず一人「一役切り」が基本で、一人で二役・三役の小口が当たつた場合は順番の「前小口・次小口」の者から勝手の良い小口場所へ出勤するようにとの但し書きを付けている。<sup>24)</sup>

但諸御用常躰ハ先ツ一と役切りニ而、別之小口ニ候所ニて屯人江二役三役之小口続当り居候節、前小口・次小口之者ハ速ニ勝手能キ方江参候様及論候得ハ如何ニ付、右書出置候、

これによると、小口の出世が連続したり重なつたりした場合、「及論候得ハ」とあるように、順番をめぐつて争いが起こつた事例が多く、それを未然に防ぐために書き出したとしている。限られた同心人数では職務の遂行が困難で、二〇以上の小口勤務がお互いを圧迫していたことが示されている。

勤務が過剰であつたことは、御番方にある者が町廻りの小口は四日目・五日目に出勤することとなつていたが、番方が無人になる場合は「差略」することとか、「諸出世順例之通出世当テ」たうえて、勤務の人がいない場合は見習衆にまで当てることを規定していることにも示されている。<sup>25)</sup>

神事の出世は日吉山王社の神迎・神送りに関わるが、坂本日吉社から大津四宮社を往復する祭礼で、坂本から大津に向かう神を迎え、逆に送る神事である。迎えには、当番は前日に当番・夕番・泊番が勤め、翌日は休みとなつていた。神送りの際は、塩谷町までは神の後に続く

金棒引として二人が行列に並び、ほかに鍵持二人、組頭兩人、御番から二人が出役し、それに供の者・雨具持ちが並ぶ。<sup>26)</sup> 大津代官所の同心が山王社・四宮社の神事に出向く事情は、今のところ不明であるが、同心の神事への出世は興味深い事柄である。<sup>27)</sup>

出世のなかで、もつとも同心らしい勤務は「捕之部」であろう。本文には「捕もの之部并取り鎮メ之事」とあり、治安維持と盗賊・捕縛、乱暴者らを取り鎮める職務である。出勤は席順に拘わらず、御用番・跡御用番助口と定められている。事例には、紀州家中の乱心者を取り鎮めた件、小堀和泉守家中の者が家来を斬り殺し、さらに旅宿の女房らに手傷を負わせて逃げ去つた者を捕らえた件、また天明元年十一月二十二日に牢抜けをした五人の者を捕らえた件などがあげられ、同心らの出世への対応前例を記している。<sup>28)</sup>

臨時勤務および非常時の勤務は、これら捕らえ者に対する出世のほか火事への出世があつた。特に無人中の出火には番方に加え組頭・目付方・書記方が出向く体制であつた。

### 三 大津同心の勤務実態―『町方御用留』にみる―

#### (一) 大坂屋喜八妻はる窃盗一件

代官所附の同心という位置づけから、大津代官所同心は代官の町奉行的性格に対応した職務に特色があつた。その一つは大津市中の治安維持と訴訟、窃盗・盗賊の取締と捕縛および吟味であり、二つは遠国奉行的役割に伴う職務執行のあり方である。遠国奉行的な役職の実態

については別に検証することにして、ここでは大津代官の町奉行の性格に関する事例を取り上げておきたい。

事例は大坂屋喜八妻はるが引き起こした反物盗取一件である。これは『町方御用留』と題された天明五年（一七八五）正月以後の大津市中の窃盗・盗賊捕縛・吟味と裁許の記録の一つで、その冒頭に載せられている。事件は、表向きは大坂屋喜八はるを首謀者とした、夫婦ものを含む三六人が関係した大きな窃盗事件である。表3はその関係者と裁許の一覧であるが、死罪一名、過料九名、急度叱り二五名、居町払一名、大津払一名が裁許結果である。

記録によると、事件は安永九年（一七八〇）子の十一月に始まり、天明三年に至って解決しているが、その経過を確かめておこう。事件の概要は喜八妻はるの裁許記録に示される。<sup>29</sup>

津上北国町

木屋そよ借

去ル卯四月十六日入牢  
一辰間 正月十八日

家大坂屋喜八妻

死罪

はる

是者去ル子年十一月以来屋之内大津町ニ而呉服屋・木綿屋其外式拾三ヶ所江罷越、買物等致度旨申聞品々取出さセ候内透聞見合木綿反物其外盗取、又ハ式ヶ所江留守を考夜分罷越着類其外盗取候分共、物数都合百七拾式品、銭八貫五百文、右品之内九拾八品者代銭四拾式貫四百五拾八文之質物ニ置貫、右質札之内五枚ハ代銭壹貫七百五拾文ニ売払、七拾七品者代金式分銀六匁八分、銭三拾五貫三百廿七文ニ売払、式品者銭壹貫九百文者箒屋源兵衛妻きよ江預ヶ置、壹品者道具屋五左衛門江預ヶ置、壹品者着用ニ致、右質

物置貫ひ并売払盗取候銭共都合金式分銀六匁八分、銭八拾八貫三拾九文之内八百文所持致罷在、其余不殘家内入用ニ遣ひ捨候儀共不届至極ニ付、牧越中守殿江相伺候上、書面之通御仕置申付候、はるは「去ル子年」つまり安永九年十一月から屋の内は大津町の呉服屋や木綿屋など二三ヶ所を訪れて買物をするような振りをして品物を出させ、透き間をみて木綿反物などを盗み取り、夜になると留守の店ニヶ所に行き着類などを盗む行為を繰り返し、総計一七二品、銭八貫五〇〇文を盗み取つていた。<sup>30</sup>

この事件の特異さは、窃盗品を盗んだ本人一人ではなく、他の者に預けたり、代わりに質物に置いて貰つたりして、三六人も共犯者があつたことである。はるは、まず盗んだ品物のうち九八品を代銭四二貫四五八文で質に置いて、その質札のうち五枚を売り払い銭一貫七五〇文を得、七七品を売り払つて、金二分と銀六匁八分および銭三五貫三二七文を得ている。このほか二品を箒屋源兵衛妻きよに預け、一品は道具屋五左衛門へ預け、代わりに質に置いて貰つたり売り払つて貰つたりして、銭八八貫三九文を所持していたと記す。

やや計算の合わない部分もあるが、はるの盗品が夫をはじめ箒屋・塗師屋・豆粉屋・道具屋・蠟燭屋・米屋・指物屋・糍屋・布屋などの商売人・職人とその妻、日雇働・無宿など様々な共犯者によつて処分されていた。その供述のほとんどが「大坂屋喜八妻はる盗物之品とは存ぜず」とあり、はるから盗品とは知らずに買い取つたり、預かつたり、質物に置いたりしたとしている。

その供述を取り、裏付けを行つたのは同心である。はるが盗み取つ

表3 安永8年反物盗取一件裁許記録一覧

処罰者	閏正月18日裁許罪状	罪状理由
大坂屋喜八 妻はる 大坂屋喜八 (はる夫)	4/16入牢一死罪 居町払	呉服屋・木綿屋ほか23ヶ所 木綿反物・銭ほか盗取 盗品質入・売り払い
箒屋源兵衛 妻きよ 箒屋源兵衛 (きよ夫)	急度叱 急度叱	はる盗品預かり(木綿袷1・鏡1銭1貫900文) きよの盗品預かり見逃し
塗師屋傳四郎 豆粉屋弥兵衛 亀屋又四郎 妻とみ 亀屋又四郎 (とみ夫)	急度叱 急度叱 急度叱 急度叱	盗品買請(嶋木綿3反・木綿引解1水牛櫛1・水牛笄2・象牙櫛1・質札1) 盗品買請(郡内嶋きれ3・紅きれ1・白木綿1反・質札1) 盗品買請(嶋木綿2反・白木綿1疋・郡内嶋2反)
松屋甚兵衛 亀屋助右衛門 伏見屋五兵衛 妻しめ 伏見屋五兵衛 (しめ夫)	急度叱 急度叱 急度叱 急度叱	とみの盗品買請見逃し 盗品買請(茶釜1・鼈甲13・鼈甲笄1・半紙1束) 盗品買請(嶋木綿1反・嶋木綿きれ1) 盗品買請・所持(白木綿2反・嶋木綿3反・郡内嶋1反・郡内嶋きれ6・紬女 帯地1筋・縮緬染きれ1・青梅嶋3反・木綿前垂れ地1・絞木綿きれ3) しめの盗品買請見逃し
萬屋喜兵衛 八百屋源兵衛 道具屋五左衛門	急度叱 急度叱 急度叱	盗品買請・所持(鼈甲11枚) 盗品質札買請・質請・所持(青梅嶋1反・浅黄縮緬小きれ1白綸子半襟 1・木綿小紋1反・木綿嶋2反の質札3枚) 盗品買請・所持(打拔1挺・真鍮仏器1・間鍋1・木綿綿入羽織1木綿 綿入単衣物1・延綿掛目150日ばかり、木綿袴1) 品夫名前で質物置(嶋木綿3反)
日雇働平蔵妻 まつ 日雇働平蔵 (まつ夫)	過料銭3貫文 急度叱	まつ盗品質物置見逃し
蠟燭屋治郎兵衛 日雇働文七 妻さと 日雇働文七 (さと夫)	急度叱 (質代銭・質物取上) 過料銭3貫文 急度叱	盗品質物取請(平蔵妻まつより嶋木綿3反) 盗品夫名前で質物置・世話料貫請(嶋木綿1反・小紋染木綿きれ2・木綿 反物ほか物数11品) さと盗品質物置・世話料貫請見逃し
笹屋八郎兵衛 近江屋次兵衛 後家いよ 住吉屋卯右衛門 妻いそ	急度叱 過料銭3貫文 過料銭3貫文(質代銭半 分償い) 急度叱	盗品質物取置(さとより嶋木綿1反・小紋染木綿きれ2)質物取上、さとへ 質代銭償い申付 盗品質物置(木綿蒲団引解2・木綿きれ2・木綿小紋染1反) 盗品質物置(嶋木綿袷1反・嶋木綿小紋染1反・嶋木綿小紋染きれ4とろ めん男帯地1筋・木綿前垂れ地1・綸子ふくさ地1・小倉男帯地1筋絹き れ6・染木綿2丈ばかり、木綿きれ2・青梅嶋2反) 妻いそ盗品質物置見逃し
住吉屋卯右衛門 (いそ夫)	急度叱	盗品質物取置(文七妻さと・次兵衛後家いよ・卯右衛門妻いそより物数25品)
米屋七左衛門 指物屋小兵衛	急度叱 過料銭3貫文 (質代銭半分償い)	盗品質物取置(とろめん男帯地1筋・青梅嶋1反・郡内嶋1疋・郡内嶋き れ3白木綿3丈ばかり、嶋木綿きれ2・紅縮緬きれ3・絹浅黄きれ9尺ば かり、木綿絞1反・絹染きれ1丈6尺ばかり、さらさ風呂敷1・紬女帯地 1筋・木綿小紋きれ1) 盗品質物取置(指物屋小兵衛より物数18品) 盗品質物取置・買請・世話料貫請(嶋木綿2反、内1反買請・世話料)
伊勢屋利兵衛 大津屋六兵衛 後家とめ 日雇働長蔵 母とめ 日雇働長蔵 (とめ倅)	急度叱 過料銭3貫文 (世話料・買請品取上) 過料銭3貫文 (世話料取上) 急度叱	盗品倅長蔵名前で質物置(嶋木綿3反、世話料貫い請け) 母とめ盗品質物置見逃し
船屋善太 妻さち 船屋善太 (さち夫)	過料銭3貫文 急度叱	盗品夫名前で質物置(糸入嶋袷1・木綿襦袢1・黒緞子女帯1筋・)
糍屋久右衛門 高島屋庄七母 さよ 高島屋庄七 (さよ倅)	急度叱 過料銭3貫文 急度叱	妻さち盗品質物置見逃し 盗品質物置(六兵衛後家とめより嶋木綿2反、長蔵母とめより嶋木綿3反、 善太妻さちより糸入嶋袷1ほか2品) 倅庄七名前で質物置(嶋木綿1疋)
雁金屋五兵衛	急度叱 (質物取上・質代銭償)	母さよ質物置見逃し 庄七母さよ質物取置

備考：大津代官所同心佐久間家文書『町方御用留』による。  
内訳は関係37人(死罪1 過料9 急度叱25 居町払1 大津払1)となる。

た二三ヶ所の呉服屋・木綿屋の確認、盗品の品物と点数、金・銀・銭高の確認があった。さらにその品物が三六人に渡った経緯の確認もまたそうである。その点は「質請人」から得た品物をさらに質に置いたり、また品物の出所も糺さずに預かったり売り払って「急度叱」の処罰をされた事例が多い（表3）。

また過料銭三貫文を科された事例をみると、日雇働人文七妻さとは出所も糺さずに、夫文七の名前で質に置いて「世話料」を貰ったという理由から過料銭となっている。これに対し吟味では、夫が妻さとの所業を知らないというのは認められないとして「急度叱」であった。同様に近江屋次兵衛後家いよも過料銭、住吉屋卯右衛門妻いそもまた質物に置いた罪で過料銭、しかも質代銭を半分償い（弁償）を命じられている。夫卯右衛門は文七と同様の理由で「急度叱」であった。

これらの記録をみると、事件の特異さがさらに見えてくる。夫よりも妻の方が罪状が重いのである。これは、はるを中心とした後家・妻などの間に何らかの犯罪集団としてのまとまりがあったことを示している。文七妻さとは質物に置いた際に世話料を取っているが、このことも常習的に犯罪を繰り返し、その都度盗品を売り払い・質入れする統制のとれた集団であったことを推測させる。

犯罪集団の件はさておいて、その供述に対する裁許は天明四年閏正月一八日に、京都所司代に伺いを立てたうえで、裁許が下された（表3）。

主犯格のはるは死罪、その夫は「居町払」（追放刑）となっている。その理由は盗品を質物に入れたり、売り払うなどして家内入用（生活

費）にしていたのに、盗品とは知らなかったなどと供述しているが、同居しながら知らないということは「申し立て難い」と断定している。死罪と居町払の差異はどこから来ているのか、また「急度叱」となった者たちの品物はすべて取り上げられているが、売り払った品物はどうなったのかについての記事はない。

## （二）草津宿召捕盗賊一件

『町方御用留』には、さきにあげた舟木詰や大津駅お通りなど同心の職務に対応した勤務が記録されているが、ここでは捕縛に関する事例をもう一つ見ておきたい。

大津代官は遠国奉行的役割も担っていたようで、草津宿の盗賊肴屋専蔵を捕縛し、その吟味を執行している。天明五年六月二一日、石原清左衛門手代田中龍右衛門・若山彦市・徳田佐五右衛門は草津宿六町目住居の専蔵を大津で召し捕り、清左衛門から早々引き渡しを申し付けられ、相手方本多千吉内（家臣カ）間嶋左橋兵衛・菅井次郎大夫・若林太右衛門宛に切紙を差し出した。これに対し、引き渡しを承知した旨の返事があった。<sup>31)</sup>

以切紙致啓上候、然者

御領分草津宿六町目西側川方三軒目丹後屋金兵衛并同町橋際二住居いたし候専蔵与申もの、当表二而召捕候盗賊差口之もの二御座候間、早々御召捕御引渡被成候様可得御意旨清左衛門申付、如斯御座候、以上、

六月廿一日

田中 龍右衛門



若山彦市  
徳田佐五右衛門

間嶋 左橋兵衛様  
菅井 次郎大夫様  
若林 太右衛門様

御切紙致拝見候、然者草津宿六町目西側川より三軒目丹後屋金兵衛并同町橋際ニ致住居候専蔵与申もの、其御表ニ而御召捕之盜賊差口ものニ御座候、早々召捕御引渡申候様ニ奉得貴意候、役人共江為申聞取計可仕候付、此段清左門様江被仰上可被下候、右貴意如斯御座候、以上、

六月廿一日

若林 太右衛門  
榊原 軍左衛門  
菅井 次郎大夫

徳田佐五右衛門様  
若山彦市様  
田中 龍右衛門様

但し左橋兵衛致転役、右跡役之儀被申付軍左衛門相勤罷在候、乍次得貴意候、自今御用節御通意可被下候、以上、

本多千吉側の担当者が転役で交替しているが、同日付けで返事が出されている。また「役人共江為申聞」せたとあるように、引き渡しに対応したのは手代ではなく「役人」であった。役人とは問屋役人か、または大津代官所同心か不明であるが、六月二二日付の切紙には本多

千吉内の三名が「昨日預御紙面役人彼地江罷越吟味致候処」とあり、吟味役人は手代ではなく同心であったとみられる。<sup>32)</sup>

二二日の吟味の際に、専蔵と共に召し捕られた丹後屋金蔵という人物は草津に居住していないこと、その者は丹後屋佐右衛門であることがわかり、この盜賊召捕は新たな展開をみせる。これ以後は専蔵と金兵衛こと佐右衛門の兩人が関わった事件となる。六月二八日・二九日には引き渡しのあった専蔵の家財改め、所役人が付き添って罷り出ることが菅井・榊原・若林から田中・若山・徳田へ伝えられ、その関係者を取り調べるために、本人の妻しづ、しづの妹とわ、旅籠屋惣兵衛、専蔵の近所に住む働人次兵衛、その妻よし、桶屋よしに対して、二九日朝四ツ時（午前一〇時ごろ）に大津御役所へ出頭を命じた。

その結果、佐右衛門の生国美濃国本巣郡生津村まで調査に出向き、百姓作右衛門の悴直八こと佐兵衛で三六才であったこと、また専蔵も尾張国宮宿きのめ町肴屋才次郎の悴で三六才であったことが明らかになっている。この後、七月五日・六日、一〇日、二〇日、二三日、八月八日・一五日・一七日・二二日と吟味が続けられ、一〇月二日に専蔵らの一定の裁許があった。

その過程で、大津で捕縛した佐右衛門こと佐兵衛と専蔵が近い関係にあったことがわかり、その生国である美濃域巢本郡村まで調べに向いたのである。佐右衛門については作右衛門の悴あるいは村には同名の人物は存在しないとの情報や事実が明らかになり、かなり紛糾している。

とりあえず一〇月二日には専蔵と佐右衛門（つまり佐兵衛）の関わ

り合いの者も含めて、両人の吟味中町預け・他参留・遠方留という申し渡しとされている。この後も吟味は続いたようで、一二月二日には専蔵の家財の取扱について、御役所への納入という見方もあったが、領主本多千吉が取り上げることで決着している。

以上の事例は、大津代官所での盗賊などの吟味に関する取扱方が、代官所手代の指示のもとで同心が実質的な調査・吟味に当たっていたのではないかという推測ができる。それは舟木詰は同心らの小口勤務の一つであったが、材木座惣代が材木を落札した際に、天明五年九月二三日付けで手代衆宛に代銀四貫三百八十七匁五分五厘を上納し、それに詰番の同心安井喜右衛門が奥書している事例があるからである。

#### 覚

一銀四貫三百八拾七匁五分五厘

右者松木御番所当已正月ヨリ同六月迄十分一御運上材木三千八百八拾九本御払代銀、落札人材木座善左衛門・同清兵衛・同嘉左衛門、彦根吉次郎、草津七左衛門・同所儀助・長浜次兵衛と取立上納仕候処、如件、

材木座惣代

立会

天明五年己九月廿三日

勘 七印  
九郎右衛門印

徳田佐五右衛門殿

若 山 彦 市殿

田 中 竜右衛門殿

七 里 官 助殿

内堀伴九郎殿  
牧川 左一兵衛殿

右之通相違無御座候、以上

己九月

詰番

安 井 喜右衛門印

落札人は材木座の者のほか彦根・草津・長浜七人で、運上材木三八八九本を落札した。安井喜右衛門は西組の同心である。落札代銀に加え、材木座冥加銀も惣代が九月二七日に上納しているが、請取証文を惣代宛に出しているのは安井ではなく、牧川・内堀・田中の三名の手代衆である。

これらを見ると、同心の勤務の位置づけが大津市中の治安維持と盗賊捕縛を主軸としており、郡部在方の諸事はやはり代官手代が取り仕切っていたようである。

#### おわりに

大津代官所の同心は徳川政権の支配機構からみても、特異な事態である。これは大津代官が三職兼帯であったことによっているとみてよいだろう。職務内容は在方直轄領と大津市中・大津百艘船の支配管轄から、代官と用人・手代・下役などに加えて同心二〇人も関わっていた。

京都町奉行・大坂町奉行などの遠国奉行の職務についても『町方御用留』『御組出役定書』などをみると、それに繋がる職務があったことが確かめられる。この実態の把握は詳細に論じられたことはなく、

そのためには大津代官の同心体制の形成と背景の検証が必要である。

本稿では具体的な事例を検証して、代官所同心の勤務と職務実態を概観したが、今後の研究の手がかりになると考える。

#### 〔注〕

- (1) 代官に同心の配属という事態は多くは見られない。特に徳川政権の支配行政機構が整備された寛永期以降ではほとんど見られない支配態勢である。
- (2) 『新修大津市史』近世編(第三巻・四巻)は近世初期豊臣期から徳川期の支配変遷について、軍事的位置づけから見た近江坂本から大津への拠点の移動として述べ、大津の直轄支配と大津代官の在方・町方および舟運支配を述べるが、石原代官に配属された同心の勤方と実態についてはほとんど触れてはいない。
- (3) 藤井譲治『京都町奉行の成立過程』(京都町触研究会編『京都町触の研究』岩波書店、一九九六)他。なお朝尾直弘『近世封建社会の基礎構造』、第五章「畿内における幕藩制支配」参照(御茶の水書房、一九六七)。
- (4) 寛永期の支配行政整備後に、豊臣政権以来重用された土豪や在地小領主層出自の代官が、勘定奉行・勘定所出身の吏領代官に切り替えられていった。研究は朝尾直弘掲書、佐々木潤之介『幕藩権力の基礎構造』(御茶の水書房、一九六四)以来、現在に至るまで続いている。村田路人『近世広域支配の研究』(大阪大学出版会、一九九五)、岩城卓二『近世畿内・近国支配の構造』(柏書房、二〇〇六)、小倉宗『江戸幕府上方支配構造の研究』(塙書房、二〇一一)などがそれである。
- (5) 『京都武鑑』(叢書京都の史料7、京都市立総合資料館)。
- (6) 与力・同心の明治維新への対応は多くは検証されていない。京都の与力・同心については拙稿「王政復古期の京都警固体制」(『鷹陵史学』第四十号、二〇一四)参照。
- (7) 京都・大坂については、京都所司代・大坂町奉行所の与力・同心が土

着化した背景や実態を検証した。大津の場合も同心の土着化として、同様に考えている。なお拙稿「大坂町奉行所における与力・同心体制の確立」(佛教大学『文学部部紀要』九〇号、二〇〇五)、「近世京都における与力・同心体制の確立」(佛教大学『歴史学部論集』第二号、二〇一二)を参照。

- (8) 『寛政重修諸家譜』(以下『諸家譜』)第十、一一五頁。
- (9) 『諸家譜』第十、一一六頁。
- (10) 『西山町字大濱一件留』(大津代官所同心佐久間家文書)。
- (11) 大津代官所同心佐久間家文書。
- (12) 五代將軍綱吉期に、旧来の代官の肅正と勘定奉行所育ちの吏僚代官への切替、幕府勘定所機構の改変、京都・伏見および大坂・堺町奉行の改変等が行われている。大津蔵奉行の廃止や大津世襲代官の停止もまたその一環である。『日本歴史』近世編、最近の研究整理としては高埜利彦『天下泰平の時代』岩波新書参照。
- (13) 『大濱一件留』の延享三年十月の大津同心東組頭多賀恒右衛門による覚。
- (14) 『大濱一件留』の明和八年九月の大津同心東組頭多胡甚左衛門による覚、明和九年十一月の組惣代多胡甚左衛門・高田武左衛門による「奉願口上書」。
- (15) 『大濱一件留』の安永二年正月の石原清左衛門から御勘定所への書上「覚」。
- (16) 元禄十二年は京都の与力・同心にとつて、土着化の契機であった。二条城御門番組の与力・同心もそうであった。拙稿「近世京都における与力・同心体制の確立」参照。
- (17) 前掲『新修大津市史』第四巻、近世後期。
- (18) この点は、いわゆる支配国の支配・管轄に関する大坂・京都町奉行と大津代官との競合、調整が必要になる事態を生じさせ、特に盗賊・殺傷などの捕縛や裁許に関して頻出している。別稿で検討する予定である。
- (19) 大津代官所同心佐久間家文書。

- (20) 『京都武鑑』 史料叢書京都の歴史7、京都市立総合資料館。
- (21) 宝暦十一年の『仲ヶ間申合條目』（大津代官所同心佐久間家文書）。
- (22) 『仲ヶ間申合條目』天明五年（一七八五）『御組出役定書』（以下『出役定書』）。
- (23) 『出役定書』、前掲拙稿「大坂町奉行所における与力・同心体制の確立」、「近世京都における与力・同心体制の確立」参照。
- (24) 『出役定書』「常例之部」。
- (25) 前同。小口の出役については、相撲廻りや町役中町廻りなども番方の立会があった。
- (26) 『出役定書』「神事之部」。
- (27) 日吉社・四宮社神事への同心の出役はこれまでほとんど触れられていない。『新修大津市史』近世編には日吉社・四宮社の神事について触れるが、その理由、特に同心が金棒引をする理由については触れるところはない。
- (28) 『出役定書』「捕之部」。
- (29) 『町方御用留』。記録は安永から天明五年十二月までの裁許記事である。
- (30) 今でいえば万引であるが、はるは死罪となっている。継続性と悪質さがその理由であろうか。
- (31) 天明五年『町方御用留』。以下注記しない限りは、史料は同記録による。
- (32) 代官所手代と同心の関係は今後明らかにされる必要がある。現時点では郡部・在方の取扱は元締・手代などの本来の代官所機構により、市中については同心という区分けがされていたといえよう。

〈付記〉大津代官所同心佐久間家文書の閲覧・利用については、佛敎大学附属図書館の御高配を得た。記して謝意を表します。

（わたなべ ただし 歴史学科）

二〇一五年十一月十六日受理